



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



加藤隆寛氏(仙台育英学園高等学校)

秀光中学校・仙台育英学園高等学校秀光コース進路指導部長
MYPサイエンス、DP物理担当。

「教育の本質は「学ぶ手法」を伝えることにあります。私は生徒と常にフラットな立ち位置で一緒に学ぶことを意識しています。」

「探究型学習」を中心に据えるIB教育が自分の やりたかったことに一致

現任校に新卒で着任し、今年で7年目になります。ちょうど一年目は本校のMYPの立ち上げのタイミングだったこともあり、MYP（IBの中学相当カリキュラム）とDP（同高校相当）について勉強するいい機会でした。負けず嫌いな性格もあり、積極的にワークショップに参加するなど、自ら熱心に学び、IBの知識を身につけました。元々教員になりたいという思いはありましたが、IBの教員になるということは想像しておりませんでした。しかし、研究をしながら教育に携わりたいという私の考えに、「探究型学習」を中心に据えるIB教育は、まさに自分のやりたかったことと一致しました。

私が物理に興味を持つようになったのは高校3年生の時で、所属していた合唱部での出来事がきっかけです。当時の物理の先生が、「きれいにハモるとするのは物理学で説明できる」と数式を書いてくれたことが起爆剤となり、もっと自分で調べたいという強い気持ちが生まれました。その後は家で自分の歌声を録音し、それを理論化し、友達に共有する、ということを始めました。それが私にとって初めての「探究活動」だったように思います。社会人になった今でも合唱は続けていて、現在は合唱部の顧問として生徒にも教えています。

学力で測れないようなスキルを伸ばしていけるのも IBの良さ

学校の先生はもちろん知識そのものも教えますが、そ

れ以上に、どのように知識を得ることができるのかを教えることが重要だと思っています。私はIB教育を実践する上では、生徒と常にフラットな立ち位置で一緒に学ぶことを意識しています。IBのカリキュラムの課題は答えのない問いに対して、様々なデータを分析して自分の意見を述べる必要があります。その中で、教員の立ち位置はロールプレイングゲームに例えると、生徒と同じパーティーで戦っているようなイメージです。基本的に私が先導していくのですが、時々生徒が「こういう考えはどうか？」という会心の一撃を繰り出し勝ち進んでいくような、そんな感覚です。最後に出来上がった成果物を見て、「高校生でもこんなことができるんだ！」と感動をもらっています。従来の教育にある教科書をいかに読み解くかではなく、学習の制限を設けず、教科書の枠を超えて学びを深めていけることはIB教育の魅力です。高校生から大学生が行うような実験をしてはいけない、なんてことはありません。知識というのは万人に平等であるべきだと思っています。

IB教育に携わっていく中で、勉強があまり得意ではない生徒も、友達とコミュニケーションをとりながら新しい知識を見出したり、好きなことを追求したりする中で、どんどん輝きを増していく印象を受けます。こうした学力では測れないようなスキルを伸ばしていけるのもIBの良さだと思います。IBの良さをさらに引き出すために、本校の取り組みの一環で、ATLスキル（IBの提唱する一連の“学び方”のスキル）によって、自分達が社会の中で出来ることは何なのかを考えていくワークショップがあります。この学びは、地域や社会の中にある課題に対して、自分たちにも出来ることがあることを

実感することが目的です。実際のこういった活動に対しては、保護者からの評判も良く、大変意味のあることだと実感しております。一番初めはIB教育を進めていく中で、不安だったことも多かったですが、6年が経ち、コースに所属する全員がIB生である一期生が卒業して、IBという言葉にも慣れてきました。現在は、探究の意義がわかってきたことで、さらに教員間でのモチベーションも高まっています。

言語を学んでいく上で感じた葛藤やもどかしさも 生きる力になる

私は中学時代に1年間アメリカで生活した経験があるのですが、そこで色々な国の文化に触れて学ぶ機会がたくさんありました。当時の友人の中にベトナム人の子がいたのですが、その子が自分のもとによくガムをもらいに来ていました。アメリカではガムを噛みながら授業を受けていることも当たり前の光景でしたので最初は快く分けてあげていたのですが、それが毎日続き、そのうち別の友達まで連れてきて、友達の分までほしいと言い寄られました。ある時にはっきり断ってやっともらいに来なくなりました。言わなくても察してくれるんじゃないか、というのは自分の物差しであって、ちゃんと言葉にしないと伝わらないんだと理解し、勉強になりました。同じ人間でもこんなに生きてきた世界が違ってしまうと価値観が違うのかと気づくことができました。こういった文化の正しい理解のためにも語学力は重要ですし、こうした具体的な出来事に触れることができるのは、他言語を学ぼうと思った人の方が多いのではないのでしょうか。一步海外に踏み出せば、世界には色々な言語が溢れています。その国の言葉が話せなくても伝えることはできるかもしれませんが、言語の習得によって、もっと他の国の人たちと分かり合えたり、多文化をもっと理解できたり可能性が広がると思います。英語の文法が崩れていても、ある程度伝えることができるから必要ないのではなく、「もっとちゃんと英語を勉強したらさらに伝え合えるのでは、理解し合えるのでは？」と考えることで教科学習としての英語に真剣に取り組んでいく面も生まれると思います。そして、言語を学んでいく上で感じた葛藤やもどかしさも生きる力になると私は信じています。だからこそ多言語学習を推奨しているIB教育はとても有意義だと感じています。

周りを幸せにする行動や活動を進んで行ってほしい

IB修了生は、在学中の課程を通して、地域や世界の課題について十分理解しているのではないかと思います。実際にそれらの課題に対して、自分は何ができるのかということを考えてみる経験もしているはずですので、周りを幸せにする行動や活動を進んで行ってくれることを期待しています。自分の枠を越えて羽ばたいてほしいと思います。

答えのない問いに一緒に楽しんでいける方は、 IB教員としても充実した仕事ができる

学校とは一般的に閉鎖的な環境と思われがちですが、IBが5年ごとに行っているレビューやワークショップがあることで外部からの視点を取り入れる機会があり、ありがたいです。定期的に教員同士でもっとこうしていこう、もっとより良い環境にしていこうと共に真剣に考えることで、チームワークの向上にも繋がっています。IB教育は、教員も一緒に探究できるプログラムになっています。さまざまな分野で生徒の方が詳しくたりすることもあり、逆に生徒に教えてもらうこともあり、とても楽しいです。もちろん大変なことも多いですが、新しいことを知る喜びも経験できるので飽きません。チャレンジングなことが増えても、その分毎年自分のレベルも上がっていて、レベルが上がった状態で新しい課題に取り組めることも毎年の楽しみです。答えのない問いに出会った時に、ライブ感たっぷりで一緒に楽しんでいける方は、IB教員としても充実した仕事ができると思います。

